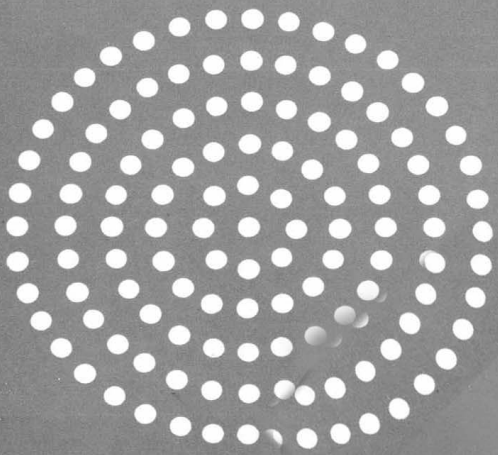
世界の詩集　6

ランボー詩集



金子光晴訳

訳者　金子光晴
1895年12月愛知県生まれ．大正３年早稲田大学に入学，中途にして慶応義塾大学，美術学校等を転転とするが，いずれも中退．大正10年にフランスから帰国，詩誌「楽園」を発行．その後国外に流浪．昭和９年帰国後，詩集「鮫」を刊行，象徴詩の域を脱し，昭和28年詩集「人間の悲劇」で読売文学賞受賞．主な詩集「落下傘」「女たちへのエレジー」「魂の児の唄」「人間の悲劇」その他訳詩多数．

昭和四十二年七月十日　初版発行
昭和四十九年五月三十日　五版発行

訳者　金子光晴
発行者　角川源義
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵東京一九五二〇八　電一〇二一
電話東京（二六三）七二一（大代表）

世界の詩集　6　ランボー詩集

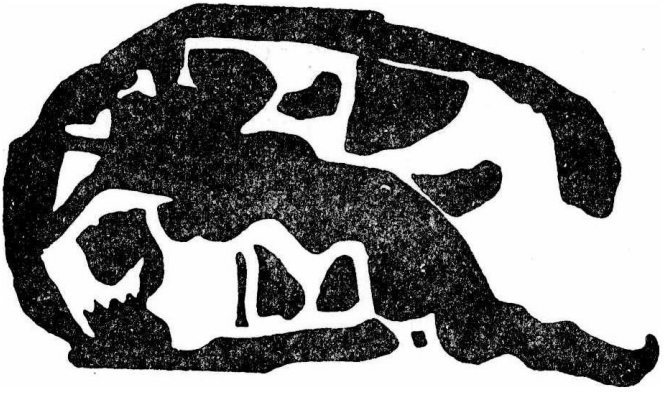
印刷カラー　暁美術印刷株式会社
本文　旭印刷株式会社
函・扉　暁美術印刷株式会社
製函　川合紙器加工所
製本　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0398-590306-0946(2)

目

次



ルイ十一世陛下に……
ルイ十一世陛下に……
初期詩篇
みなし児たちのお年玉 一七
三つの接吻のあるコメディ 二五
Sensation 二八
鍛冶屋 三〇
太陽と肉体 三三
オフェリヤ 三五
首吊りの舞踏会 三四
タルチュフの罰 三八
泡のなかから生まれたヴィナス 四〇
ニナを引きとめるもの 四二
A la musique 四七
びっくりしている子供たち 四九
小説 五八
ソネット 五二
悪 五四
セザールの怒 五六
冬のための夢 五八
谷間に眠るもの 五〇
キャバレ「緑」 五二
こまっちゃくれた娘 五四
ザールブルックの輝く勝利 五六
戸棚 五八
わが放浪 一〇〇
見者の詩篇
鴉 一〇四
腰かけているもの 一〇六
牧神の頭 一一〇
税関吏 一一二
夕ぐれどきのことば 一一四
巴里の軍歌 一一六
わがちいさい恋人たち 一一〇
しゃがむ 一二四
七歳の詩人たち 一二六
教会にあつまる貧しい人々 一二三
盗まれた心 一二六
巴里蕃息 一二八
ジャンヌ・マリの掌 一二四
めぐみぶかい姉妹 一二八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母音 一五三
四行詩 一五四
正義の人 一五六
最初の聖体拝受 一六三
蝕をとる女たち 一七四
酔っぱらいの舟 一七六

後期詩篇

涙 一八六
カッシ河 一八八
渇のコメディ 一九〇
朝のたのしいおもい 一九六
五月の軍旗 一九八
忍耐 一九八
いちばん高い塔の歌 二〇〇
永遠 二〇四

黄金の時 二〇六
新世帯 二一〇
ブルッセル 二一三
彼女はアルメか？ 二一六
饑の祭 二一八
眩暈 二二〇
沈黙 二二三
ミッシェルとクリスティヌ 二二四
恥辱 二二六
記憶 二二八
幸福 二二二
イリュミナシオン
海 二二六
うごき 二二八

解説
ランボー・人と作品 二四一
鑑賞 二五二
年譜 二六七

ランボー詩集

ルイ十一世陛下に……

ルイ十一世陛下にささげるシャルル・ドルレアンの言葉

陛下よ。

うっとうしい雨の季節はあがって、もうそこへ夏の先ぶれがまいっております。くさくさした顔つきなんて、西の海へさらりとすてることにいたしましょう。詩や、バラード万歳、教訓や、娯楽万々歳です。それにしても、バゾッシュの書記どのたちは、僕らに、なんたるばかげた茶番狂言をみせてくれたのでしょう。

教訓のなかには、おもいつきのいいのもあり、また、どうにも感心いたしかねるものも、ままありますが、ともあれ聞くといたしましょう。テオフィリュス僧正の改宗だとか、聖ポーロと、聖ペテロがローマへどんなふうに辿りつき、どんなふうに殉教したかといったようなことなんです。装身具や、刺繍をいっぱい身につけ、襟をうら返したあの貴婦人方には、特別に祝福を送るつもりでございます。青空の天蓋がこんなにあかるくたかだかと張りわたされ、太陽があまねく照りかがやいているときに、甘い短詩、調子のたかい、うつくしい小唄がながれてくるのを、木蔭できくのはなんとも言えずたのしいことではございますまいか。

陛下よ。

私も、愛するために生えた一本の木でございます。かつては、愛するなんてこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、貴婦人か、やさしい貴人の特権でしたが……陛下よ。そして、あなたさまが、私にしてくださるように、あの男にもしてやってくださったらと、お願い申しあげております。あの男っていうのは、すなわち、パン切れと水で養われ、コオロギのようにあわれな声で鳴きながら、今は、小城の奥ふかくで、詩をつくったり、泣いたり、嘆いたりしている善良なひょうきん者、やさしい嘲弄好き、フランソワ・ヴィヨン先生のことなのでございます。そのヴィヨンが陪審員連の前で、絞首刑だと宣告されたのです。そこで、このあわれなおろかものは、もうすっかりふるえあがって、じぶんと、友人のための墓碑銘を作りました。陛下が、その詩句を御愛誦になります、あの気のよいふざけものの詩人たちは、霧雨と太陽のなかでたのしく詩を綴るのぞみをすてて、モン・フォーコンの丘で、小鳥らの嘴で突っつかれておどるのを待っております。

おお、陛下、あそこでヴィヨンは、おろかな愉楽をいのちとして生きています。下賤な身には、苦労がつきものでございます。大学の令書を首を鶴にして待っている書生たち、なまけものの一まき、猿廻し、分け前は歌で払う三絃胡弓ひき、厩の騎士たち、二エキューの殿さま、戦の兜で鼻をかくすかわりに錫の酒瓶で鼻をかくすドイツの騎士たち。窓べりにあるパンをじっとにらむ、パン焼き竈の箒のように、ちびて、すすけて、冬は凍傷でぶくぶくしている貧民の子ども、そんな連中があつまって、ヴィヨン先生を育ての親にえらんだという、そういうわけなのでございます。貧窮は恐ろしいもので、人々を誤解させ、饑えは、森の狼を放浪の旅に駆り立てました。饑えのために、学生は、ポパンの水汲場や、ペステルの酒場で、肉屋の

バケツからシチューにする臓腑を失敬するなんていう味気ないまねもさせました。また、パン屋の店先で一ダースのパンをごまかしたり、バニューの葡萄の樽となま水の樽とを、ポン・ドゥ・パンですりかえたりするようなことになるのも、やはりその貧窮や、饑渇が原因なのでございます。（プラ・デタンでのどんちゃん騒ぎの晩、見張り番を張り倒したのもそのせいでございます）。モン・フォーコン付近で、夜食の最中、十人ばかりのあぶれ者をつれてきて、なにもかもひっかき回し、人をおどろかせましたのも、そのためでした。つまり、フランソワ先生の悪行と申すのは、大体そんなことなのでございます。あの男は絨氈敷きつめたサロンのなかに、脂肪肥りのちんまりした、細君同伴の修道僧をひっ立ててまいりました。教誨師などというやからは、奥女中か、貴婦人でなければ、いっさい、懺悔などうわの空で、きいてもいないなどと、あの男は申しました。また、カーテンのむこうで坊さんたちが、どんなことを考えているかを、冗談まじりに信者たちに忠告もいたしました。よく笑い、よく歌った、小鷹のようにかわいらしい向こうみずなあの書生は、今や、大きな裁きの爪の下でふるえております。鴉や、かけすをあとに従えた黒いおそろしい鳥、判官殿の前で……。あの男と、仲間のあわれっぽい貧乏人たちは、森の枝にあらたな数珠をひっかけます。つまり縊れる外ないのでございます。ざわざわとさわぐかなしげな樹の葉の騒ぎにつれて、風は、彼らの命を、消えなんとするロウソクの炎のようにあおります。

陛下よ。

あなたさまは、詩をこのむ人のならいであのたのしいバラードをおよみになり、

涙をためてお笑いになるでしょうが、そんなに精神こめてうたったやさしい書生がいま殺されようとしているのだということをお思い返しくださいませ。メランコリーを追い払うことはなかなかできません！

欺瞞者で悪漢のフランソワ先生は、しかし、この世界じゅうで、いちばん良いむすこでございます。彼は、ジャコバンの尼僧たちの、油っこいスープのことをあざわらいました。しかし、あの男は、夢にも、神や、聖処女や、貴いかぎりの三位一体の教会をおそれ敬うことを怠りはいたしませんでした。あの男はまた、議院や、善なるものの母や、祝福された天使らの姉妹たちをほめることも忘れませんでした！　しかし、フランス王家の誹謗ということになると先生は、酒をかきまぜながらしゃべる飲屋の主人たちにも、おさおさひけをとりません。それから、おお、神さま。あの男は、狂おしい青春を騒いで過ごすことを知っておりました。冬のあいだの餓えつかれた夜々、モーベイの泉のかたわらや、荒れはてたいずこかの沼のほとりで、彼は、麻殻を焚いて小さな焚き火にあたり、膝を地について、その痩せこけた頬を焔に染めながら、万一学業成就のあかつきは、家と柔らかい寝床がもてると夢みてたのしんでいたのでございました。竈の箒の騎士そっくり、空腹で腰をふらふらさせ、くらい顔をして、他人の家のほぞ穴から、食堂をのぞきこんだものでございます。〝おお。すげえぞ。うまそうだな。おごったもんだなあ。あのタート。あの蒸し菓子。それから、金箔でつつんだあの大きな牝鶏！　タンタロスよりも、俺はうえてゐる。あぶり肉だ！　あぶり肉！　琥珀よりも、麝香猫よりもすばらしい、惚れ惚れするようなあぶり肉！　あっ、あの銀の大水さしのなかには、ボーヌ

の葡萄だ！　ハーロ、のどがくびくびしやがる。おお、俺はそんなふうにしつけられている！　……俺の酒漉し袋、胃袋の方へ舌はつられ、俺の窓という窓をひらくHucque！　鋸歯状のフェルト帽！　俺も、ヴァイオリンひきのオルフェスのように、おもう存分歌えるように、あの気の毒なアレクサンドルにめぐりあいたいものだ！　そうさ。死ぬ前にたった一度でいいよ。花々しい目にあいたいものだ〃

あの男は、そんなことを考えております。しかし、見てやってくださいませ。古ぼけた屋根にさしのぼる月の効果、地上の燈火の効果をもってしても、詩人どものうたげときたらみすぼらしい限りでございます。まったくみすぼらしいんです。スカートをきっちり穿いた、小股のきれあがった街の女たちは、通行人の気を引こうと、コケットなしぐさをしてゆきます。居酒屋ときたら、外からは、まるで燃えあがっているやうで、よっぱらいどもの叫喚でわき返っております。錫の酒瓶のぶつかりあう音、長剣のじゃらじゃら、あぶれものの口論、乞食どもの三絃胡弓にあわせるがさつな唄、そういった騒ぎで逆上あがりそうです。家の階段や、大きなうつばりが互いに支えあって突き出ている陰鬱な路地のことをお考え下さい。夜がふけわたりますと、曳きずる剣の音や、わらい声や、いやらしい叫びが通りすぎてゆきます。……小鳥が、おのれの古巣にかえってゆくのです。つまり、酒場や、女のところへでかけてゆくのです。

おお、陛下。この聖代には、風のままに羽を飛び散らさせておくことは穏当とはおもわれません。みんながたのしく唄い、笑い、癩病のようにくずれた壁にも嘻々とした太陽がかがやく五月の季節に、首をくくる綱なんて、まったくぞっとしませ

ん。あんまり無束縛にもあきて、絞首刑が存在するのかもしれませんが……。ともあれ、ヴィヨンのいのちは議院の人たちにぎられているのでございます。鴉どもは、小鳥の啼き声などに耳もかそうといたしません。

陛下よ。

あの心やさしい書生どもをしばり首にいたすことは、正直のところ、決してよいこととは申されますまい。見ていてくださいまし。やがて、詩人どもは、この下界から姿を消してしまいます。どうぞ、どうぞ、あの一風変わった生涯を生きさせてやってくださいませ。いましばらくのあいだ、寒さや、餓えの味を玩味させ、走ったり、愛したり、唄ったりが勝手にできるようにさせてやってくださいませ。彼らは、ジャック、クール同様、心ゆたかな人間どもでございます。これらのばかげた子供たちは、少なくとも魂を韻律でみたしております。笑ったり、泣いたりする彼らのリズムは、私たちを笑わせたり泣かせたりする能力を持っているのでございます。あの男たちを生かせておいてください。神さまは、すべての哀れなものを祝福なさいます。そしてみんなは、詩人たちを祝福いたします。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com